

【本文】

自力称じりきしょうみやう 名のひとはみな

如来の本願ほんがん信ぜねば

うたがふつみのふかきゆる

七宝しちほうの獄ごくにぞいましむる

【意識】

自分を最高の抛より所とする人は
みな、

阿弥陀様のお心を抛り所にせず、

阿弥陀様の仰せを聞こうとしない
ために、

自分だけの世界観の中で終始して
しまうのです。それは、たとえるな
ら宝石に彩られた牢獄にいるよう
なもの、と言えるでしょう。

【私の味わい】

「杜子春とししゆん」(芥川龍之介)のお話です。裕福な家に生まれながらもお金を使い果たし、途方に暮れていた青年、杜子春。これを見かね、老人(仙人の仮の姿)が声を掛け

「ある場所を掘るがよい、黄金が埋まっているだろう」と言います。半信半疑ながら青年がその言葉通りに掘ると果たして本場で、再び彼はお金持ちになります。しかし、悪銭身に付かずで、すぐに底をついてしまい、以前のように貧しくなってしまう。

そんなことを繰り返しているうちに、杜子春は世間での暮らしが嫌になり、仙人になりたいたと望みます。すると仙人は、一つのことを彼に課します。それは、岩の上に座ったまま一言も口をきいてはいけないというものでした。その後、一人になった彼の目の前に猛獣やこの世ならざるものが次々と現れては脅かしますが、我慢強く声を発し

ません。すると、次の瞬間亡き父母が彼の前に引き立てられて来て、さんざんに打ち据えられるのを目にします。耳を澄ますと、母親が息も絶え絶えに「こう言っているのが聞こえてきます」お前が仕合わせになれるならそれでいい、黙っておいで」と。その親心を聞いて居ても立つてもおられず、杜子春は駆け寄り叫びます「お母さん」と――

お金持ちになることも、仙人になることも、己のことだけを考えていた。自分以外の、自分を大事に思ってくれている人と共にあってこそその仕合わせと気が付かされたのです。阿弥陀様のお心はすでに私に向けられています。気が付かされるその度に、「ナマンドブツ」とお念仏申させていただきましょう。ナマンドブツ。(悠水)